

空間の私有と管理への抵抗

— ブラジルの空間所有のあり方からの一考察 —

桔梗 聡*、水岡 不二雄**

Satoru KIKYO, Fujio MIZUOKA
Resistance Against Control and Private Ownership over Space:
A Reflexion from the Modes of Space Ownership in Brazil

I 問題の存在

近代市民社会において共同体から個人へと社会の最小単位が移行するとともに発達してきた概念のひとつとして、合衆国のブッシュ前大統領が唱えた「所有権社会(ownership society)」¹⁾がある。個人々が自己の利益を追求することで社会全体が発展していくという市場主義の思考が欧米から次第に世界全体へと浸透していった結果、近代以前は共同体の共有財産(commons)、あるいは何者にも属さない自然物として、総有(Gesamteigentum)のもとに扱われていたものが、ことごとく個人の私的所有物に転化していった。個人はできる限り多くのものを私的所有のもとに置き、そこから最大限の利益を得ることを追求し始めた。所有権社会とは、究極的には、ありとあらゆるものが私的所有のもとに置かれる社会である。ネオリベリズムは、新古典派経済学を基礎におくから、この経済学的前提に忠実に、すべてのものを私有とし、個人がそれを排他的に管理して、それを市場において貨幣を媒介して取引することのみを正統的な財の交換形態であると主張する。

空間の有界化された一片である領域の所有もまた、私有と総有という二つの形態に大別される。私有の空間というのは、文字通り、何者かによって領域が排他的に所有され、その専制的な意思決定ないし処分権のもとにおかれる疎外的な空間のあり方である。反対に、総有とは、そこを利用する人々すべてによって共有される友好的な空間のあり方である。

すべての空間がはじめから私有だったわけではない。かつて土地は「みんなの共有物」として、総有のもとにおかれていた。上記のように、空間の私有は、市場経済の浸透と密接な関係があるから、市場経済ならびに個人主義の社会への浸透がまだ十分ではな

い発展途上国は空間に総有的な性格が強く、市場経済が浸透して人々が自己利益を追求する度合いが強まるにつれて領域の私有が拡大していく。すなわち、市場経済と個人主義の広がり、空間所有のあり方を総有から私有へと転換させたものにとらえることができる。

ネオリベリストは空間の総有が「コモンズの悲劇」²⁾をもたらすと主張し、空間を有界化してできたすべての領域に「誰かの土地」として、私的所有のラベル付けをなし、これを単独の所有者が排他的に占有し管理することこそが正当であり、富をより効率的に生み出すと主張するようになった。資本主義のレジームがフォーディズムからネオリベリズムに転換³⁾するにつれ、領域私有化の傾向は、ますます顕著になってきている。現代においては、より急激でより暴力的な世界一元化の流れとしての、ネオリベリズムに基盤をおくグローバリゼーションの拡大のもとで、領域の私有化の傾向は極めて強まった。これにより、貨幣化され抽象化された「空間の表象」は、よりくっきりとした形で土地に刻み込まれる。「誰か」とは国であったり、個人であったり、企業や自治体であったりとさまざまであるが、とにかく我々はいま、常に誰かしらが所有する空間にその身をおいて日々を生きなければならないようにされている。

とはいえ、どのような時代においても、空間をすべて私的所有物としてしまうことは困難である。例えば都市空間では、確かにすべての土地が何者かによって所有されているものの、人々は、通勤・通学・購買行動など行為空間にまたがって移動するとき、誰か他人の土地を通過せざるを得ない。また、登山やハイキングというスポーツは、市民の憩いの場として誰もが平等に利用できる「みんなの土地(communs)」の存在を前提せざるを得ない⁴⁾。さら

* カタールガスオペレーティングカンパニー

** 一橋大学大学院 経済学研究科 特任教授

に、個々の領域は私的に所有されてはいても、古い町並みの残る東京の下町や都市公園などのように、多くの人々から親しまれ、それぞれの人々があたかも自分のものであるかのような帰属意識を共有する都市空間がある。

また、空間の有界化は、フロンティアが空間の希少性の増大に伴いバウンダリーに転化する過程から生ずることをふまえれば、領域の私有化は、空間の希少性が高い場合により強固となるといえる。空間の希少性は、一般に経済発展と人口増加に伴って生ずるから、ここにも経済発展と空間の私有の進展との関係の存在を認めることができる。

だが、果たして、領域の私的所有を拡大するがままに任せることは、社会の発展と個人の幸福において善なのだろうか。「コモンズの悲劇」を説く立場は、個人の利益の最大化という見地から、これは合理的だと主張する。だがそれは、空間を現に私的に所有する者の利益だけを見た一面的な考え方であるといわざるを得ない。領域の私有は、その私有から排除され、空間を奪われた人々を、経済的のみならず物理的に疎外し、抑えつけるのであって、その立場からも問題をみる必要がある。

しかし、それは哀れみの眼差しとしてではない。空間から疎外された人々は、常に奪われたままなのではなく、空間は本来総有であるべきだとする思想のもとに、反撃を企てる。領域の排他的私有が物理的な行為である以上、これへの反撃もまた、物理的な態様をとらざるを得ない。こうして、空間をめぐる、ルフェーブルが言う「空間の表象」と「表象の空間」をめぐる、社会的闘争が発生する。

この問題を考えていくにあたって、本論文はブラジルに焦点を当てる。ブラジルは、国土が広く、またアングロサクソンのネオリベリズムのように個人主義の伝統がそれほど強くないため、空間の私的所有の観念が、個人の意識レベルでもシステムとしても相対的に弱い。このことは、社会運動に、他国にはない可能性をつくりだす。すなわち、「空間の表象」に対抗的な「表象の空間」を、空間を私有しない人々が描き、自らの空間を生産する実現性がより高くなるのである。

本論文では、このことを如実に物語る事例として、都市においてファベラ、そして農村においてMSTと呼ばれる土地なし農民運動の2つを取り上げる。それぞれの事例の背景、事実、分析から、ブラジルという国における領域所有の特質と、それが現代の空間を戦略的手段とした社会運動にもたらす意義について考察を加える。もって、無批判に空間の

私有の拡大を続けるネオリベリズムのグローバル化の流れに、批判の一石を投じた。

II ファベラ：リオデジャネイロを例に

1. はじめに

現代の都市空間がかかえる問題として、しばしば「スラム」が取りあげられる。都心周辺部や都市の縁辺部に低所得者層や失業者が集住する地域が発生し、それが治安や住環境の悪化等の都市社会問題を生み出しているというものだ。

しかし、スラム自体の定義は非常に曖昧であるし、スラムそれ自体を「問題」として都市から排除しようとするには大きな問題がある。なぜなら、ここから出てくる解決策は、空間の占有者を貧困層から富裕層に転換させるジェントリフィケーションのようなものであり、スラムという場所に居住していたが、ジェントリフィケーションにより排除されざるを得ない人々の立場に全く考慮が払われていないからである。

それゆえ、本論文では、スラムを抹消されるべき社会問題としてとらえるのではなく、所有権社会における都市空間のあり方のひとつという視点から客観的にとらえ直していきたい。すなわち、スラムはひとつの都市空間のあり方であり、それは空間の所有から疎外された人々によって作り出されたものである。そしてそのあり方は、所有権社会の拡大に対するオルタナティブを我々に提示している。

2. ブラジルの都市空間編成の特徴

東京や北米など多くの都市は、オフィス街や高層ビルが集中する中心業務地区（CBD）と呼ばれる経済の中心地区を持ち、その周辺に工場や商業地区、住宅街が機能別に分布する。特に日本では、この都市構造は鉄道の大きな駅を中心に形成されることが多い。中心に近いほど高層ビルが林立するビジネス街の様相が強くなり、昼間人口が多くなる。逆に周辺部にいくほど住宅地の割合が増え、夜間人口が多くなる。すなわち都市全体の諸領域が、同心円に近い空間として編成されているのである。

それに対し、ブラジルの都市はそのようなわかりやすい空間編成が存在しないことが多い。最大の都市サンパウロはどこへ行ってもそれなりに高層ビルが建ち、ビジネス街と商店街が混然としている。高層ビルの屋上から街を見渡すと、どの方角も似たような景観が広がっている。

なぜこのような差が生まれるのだろうか。都市の

空間編成の決定要因には、まず交通手段によるアクセシビリティがある。東京は鉄道の発達に伴って都市が拡大していったため、これが都市の相対空間の枠組みを規定し、最優等地である鉄道路線とその駅を中心に、ヒトデ形に都市が発達していった。それに対しブラジルで交通手段として地下鉄が建設されたのはごく最近であり、以前から車が主な交通手段だった。そのため駅という中心が存在せず、分散した都市構造が造り出された。

自動車がやはり都市交通の中心的役割を果たす北米においては、ハリスとウルマン⁹⁾の主張するように、同質性を持つ都市機能や経済・社会階層が、その同質性において類似の近隣住区に固まって領域を形成し、同時に一方が他方を忌避する関係にある都市機能や社会階層は空間的近接をも忌避するという空間的社会過程により、都市地区ごとのその性格が特化し同質化された、「多核心 (multiple nuclei) モデル」が示す都市空間が編成される。すなわち、アングロサクソンのネオリベラリズムにおける個人主義は、このような、領域相互間で社会・経済的異質性が高く、領域内部では社会・経済的同質性が高い都市領域のモザイクをつくりだした。

3. ブラジルの都市におけるファベールの立地

一般に「スラム」と呼ばれる都市空間は、アメリカのような先進国からブラジル、メキシコ、インドなどの中進国、途上国まで、世界各地にある。では、ブラジルではどうだろうか。

ブラジルにおいてスラムは、「ファベール」という名で存在する。それは低所得者層が集まって居住する雑然とした景観をもつ都市の領域という点で確かに「スラム」だが、その実態は他国におけるスラムとは多くの点で異なる。

ブラジルのファベールが、北米の「インナーシティ」と呼ばれるスラムと決定的に違うのは、その立地である。北米のスラムは、決まって都市の中心部に隣接し老朽化した建造環境を持つ地区に貧困層が住み着くことで形成される。インナーシティには貧困な失業者があふれ、住環境や治安が非常に悪い。そのため、富裕層はほとんど近づかない。それに対しブラジルでファベールが立地する場所には、斜面が多い。これは、通常の建物が建てにくい地形であるため避けられた土地がファベールに充てられたことを示すものである。

このような斜面の土地が、合法的な土地取引の結果ファベール用地となったのであるかどうかは疑わしい。なぜなら、ブラジルでは、許可なく勝手に入

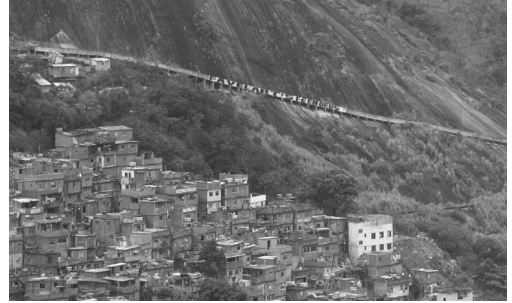


写真1：リオデジャネイロのファベール
(筆者撮影)

り込んだ土地であっても、10年間そこに住み続ければ占有権を得て、他者にその空間占有と利用に関し対抗できるようになるからである。このようなルーズな空間の占有と管理の制度が、ファベールという所有権が曖昧な空間を創り出している。

このため、北米と異なって、ブラジルのファベールの立地は既存の老朽化した建造環境の立地に依存しない。むしろ、以前の所有者が地形等の理由から事実上占有を放棄していた土地が、ファベールに充てられているのである。それゆえ、ブラジルのファベールが、北米のインナーシティのような立地を示さないのはむしろ当然である。

かかるファベールの立地は、ブラジルという国に特有の、民族的・社会的な寛容性から形成されたという側面もある。白人、黒人、インディオなど、ブラジルには様々な肌の色を持つ人々が街の中に雑然と暮らしており、相互の混血も多い。異なる人種、民族、文化的背景を持った人々が、北米と比べより親密に混住して、都市をひとつの総有的空間として形成し、ひとつの都市文化を創り上げている。それがブラジルの都市である。

ブラジルのファベールのもうひとつの都市空間における特徴は、都市の道路を隔ててすぐ、富裕層の豪邸と貧困街が隣接し向かい合っていることである。これに対し、北米でスラムが富裕層の大邸宅の隣に広がっていることはありえない。北米の多くの人々はスラムを貧困層の集まる危険な地域として忌避し、スラムが富裕層の住宅の近くに迫ってくると、富裕層は浮き足立ち、不動産価値が下がる前に住宅を売って郊外へと転居してしまうからである。このことから、北米では、所得階層を共通にする人々が、その社会集団だけで都市空間を私有化しようとする強い傾向を持つことがわかる。その究極的な形態が、門と柵で囲われたゲーティッド・コミュニティである。ところがブラジルでは、豪邸のすぐ隣にあ

とからファベラができて、そこで富裕層が出ていくという都市の空間的社会的過程が発生しない。



写真2：富裕な都市地区（左の植え込み）と道路を挟んで接するファベラ（右）
（筆者撮影）

以上のように、ブラジルでは都市の内部にファベラが散在し、ファベラが普通のものとして市民に受け入れられるようになっていく。多様な人種、多様な文化を持つ人々が混ざり合い、全体としての都市をいわば総有しているブラジルの特殊性によって、ブラジルのファベラは、都市の一部として違和感なく存在しているのである。

3. ファベラ内部の建造環境と社会

ファベラという領域内部の空間編成がどのようになっているのか、そしてファベラという都市空間をいかなる社会集団が生産し、また支え続けているのか。次にこのことを、我々が実際に視察したロシーニャ(Rocinha)ならびにヴィラカノアス(Vila Canoas)というリオデジャネイロのファベラの様子をもとに検討し、その実態に即して空間所有の問題をさらに具体的に考えていきたい。

ロシーニャは、急な山の斜面に住宅がびっしりと張り付いている。ヴィラカノアスも、道は基本的に坂道ばかりで、建物は密集し道幅は相当狭い。これは、前節で述べたように、都市の中で斜面にしか空間を確保できなかったという理由による。それでも一応、道には名前がつけられていて住所はわかる。建物はコンクリートやレンガで比較的しっかり造られていて、非衛生的ではなかった。建物は五階建て程度になっていることが多く、ひとつの建物内に多くの世帯が暮らしている。

斜面を、多数の水道管がうねって登っている。1台のポンプを共有し、それで水をくみ上げて、高いところの住宅に供給しているのだ。道の脇の電柱か

らは、まるでクモの巣のように絡まり合った電線が家々に向かっている。盗電しているのかもしれない。非衛生的でインフラが整っていないという我々の抱く一般的なスラムのイメージとはだいぶ異なり、建物の内部には電気・水道・ガスなどだいたい通っているとはいえ、そのインフラの入手方法自体が、そもそも「総有的」である。



写真3：ファベラの水道。木のドアが付いた道沿いの箱の中にポンプがあり、これで水をくみ上げ、崖を無秩序に登るパイプで丘の上の家に配水している。
（筆者撮影）

さらに、住宅の他にファベラの内部にラジオ局、ネットカフェ、銀行支店、病院、商店街などまで揃っており、街全体がひとつのコミュニティをなし、自己完結的な経済圏を形成している。低所得者層が暮らす普通の街。そんなところだろう。以上のようにファベラは、その内部に多様な機能を持ち、ひとつの街として十分に機能しうるものなのである。

ファベラにおいて問題となっているのは、教育と雇用、そして治安であろう。これらに対し、政府・NPO・地域住民など様々なセクターが支援を行い、解決を目指している。なかには、外国人を対象としてファベラ視察ツアーを定期的に催行し、ツアー客にファベラの住民が描いた絵画を販売したり、ツアーの収益の一部をファベラに住む子供たちのIT教育設備購入に充てたりするという、ファベラ住民自身が主導するNPOプロジェクトもある。このプロジェクトは、自分たちの利益になる相互扶助活動のひとつであるとファベラの住民がみな理解しているので、ツアーに参加した外国人が攻撃されることはない。ファベラの住民たちすべてが相互信頼いちげんに基づくコミュニティを形成しているからこそ、一見の外国人も安全にファベラを視察できるのだ。

しかしながら、ファベラという建造環境それ自体がなくなる見込みはない。だが、それを嘆く必要

はない。なぜなら、冒頭に述べたとおり、ファベラは、民衆にとって、その存在自体が悪ではないからである。ファベラは低所得者たちが相互扶助しあいながら生活をしていくひとつの共同体—コミュニティとして存在し続ける。すなわち、貧困のもとで生活し続ける人々が都市に存在し続けることが、その共同体を作り出し、そしてその拠って立つ空間であるファベラを存在させ続けているのである。

ファベラ自体が問題でないとすれば、どこに問題があるのか。

第一に、教育機会・雇用の不足という生活の権利が保障されない問題が、解決されねばならない。教育機会と雇用の問題はファベラに関わらず、ブラジル全体の問題であろう。教育がしっかりととされないと、高い所得を得られる職業につくことができず結局ファベラから抜け出せなくなり、その子供も十分な教育機会を与えられないという悪循環が発生する。さらに、仮に高等教育を受けられたとしても、卒業後に選択できる高所得の雇用機会が十分に存在しない限りほとんど無意味である。教育と雇用の問題は切っても切り離せない関係にある。

第二の大きな問題として、ファベラが麻薬や暴力、強盗など犯罪の温床となっている事実がある。スラムというと、麻薬や暴力といったイメージがまず浮かぶ人は多い。しかし注意しなければいけないのは、そのような一見危険そうに思える地区であっても、ファベラ内部の住民にとって必ずしも治安が悪いわけではないということである。むしろ麻薬取引集団がファベラ内の治安を守っているとさえいえるのだ。その集団がファベラの外で犯罪を起こすことはあっても、自分たちの領域であるファベラ内で問題を起こすようなことはしないという。

では、そもそもなぜファベラの存在自体が問題であるような言説が流されるのか。それは、ファベラというもの「管理されない空間」だからである。換言すれば、ファベラという都市の領域は、都市の支配者の意思のもとに完全に統合され包摂されていないのである。

最初に述べたように、現代都市の空間は、どこも何者かによって所有されている。そして、個々の所有された領域は、国家の領域を支配する法律、警察、裁判所などの権力装置によって、その排他性が保障されている。この所有者は、常に都市空間を自己の支配の意図の下に管理しようとする。そのような状況の中でファベラは、明確な管理者を持たないあいまいな領域であるという点で、特異な都市空間で

あり、その強いコミュニティの力によって権力の手すら及びにくいstray spaceとしての性格を色濃く有している。警察の手が細部まで及ばないところから反社会集団の温床となりやすいが、同時に、支配権力に対抗する運動の拠点として使われる。

東アジアにおいて、イギリスは、植民地支配していた香港やシンガポールにおいて、スクォッターが形成したスラムを除去し、これを公営住宅で置き換える再定住政策を積極的に推進した。その時香港の英植民地政庁がスラムに感じた脅威は、中華人民共和国から潜入した工作員による共産主義運動がそこに拠点を設けることであった⁹⁾。スラムを除去する政策は、stray spaceを除去し、都市空間をより強く支配のもとにおこうとする、支配的な植民地権力による治安政策の一環であった。

ブラジルにおいても、小規模ではあれ、政府がこのようなやりかたでファベラの「住環境改善」の取り組みをしたことがある。サンパウロには、シンガポール・プロジェクト(Projeto Cingapura)というものがある。このプロジェクトは、住民に「権利を与える」という名目で、ファベラで生活する人々のため、ファベラ以外の場所に五階建のアパートを政府が建設し、そこに移住させるというものであった。このプロジェクトは、シンガポールの住宅政策に学んで、管理されないファベラのコミュニティを解体し、その住人を管理された空間に移そうとした試みであると考えられることができる。そこでは、ファベラよりは衛生的な生活を保障されるが、都市の中心部にしか建設されていないために、住民は、これまでの社会的結びつきが断ち切られてしまう。家賃負担もファベラの人々の賃金水準からすると相当に高く、そこまでしてファベラの住民が主体的に入りたいと思えるような住宅ではなかったために、既にこのプロジェクトは終結した。そもそも、このプロジェクトは政府の政治プロモーションの意味合いが強かったので、実質的な効果は最初からそこまで期待されていなかったのかもしれない。

4. 小括

冒頭に述べたように、ブラジル人は、領域私有への意識が北米や日本などと比べ低い。このことは、空間を管理しようとする意識が薄いことを意味する。ここに、これまで述べてきたファベラを生み出し、支え続けている根本的要因のひとつがある。ブラジルは、支配者による空間管理がルーズな国なのである。歴史的背景から土地所有意識が低いことに加え、広大な国土を持つという条件が、ブラジル

人に空間を所有することへのこだわりを抱かせなかったであろう。このような、ブラジル国家の空間とかかわった政治的性格は、空間管理にかかわる権力装置に柔軟性と謙抑性があり、空間への権力的支配を露出させることができないことを意味する。

嚴重に空間が管理された状況においては、社会から排除された者は空間をも失う。日本のホームレスは、まさにそういう人々だ。毎夜11時になると、東京の新宿駅西口地下通路では、そこに寝泊まりしようとする人々を追い立てる放送が執拗に流される。ところが、ブラジルの空間にかかわる寛容さは、そのような人々にも生活していけるだけの場を提供しているのだ。もちろん先ほど述べたように、その緩さが犯罪集団に安住の地を与えてしまっているのも事実である。だがそれだけを取り上げてファベーラを悪だと決めつけるのは、あまりにも一面的な見方であるといえるだろう。もっと広い視点でとらえ直すことで、コミュニティ集団による空間の総有というファベーラのメリットを認めることができ、翻って、今日のネオリベリズムと個人主義がいかなる管理を空間に招き入れているのかが見えてくるのである。

日本における都市における空間の私有と管理は、いまや、土地所有だけでなく、上述のホームレスの排除や、隅々にまで設置された街路のカメラによる市民の監視にまで及んでいる。だが、それでも完全に都市空間すべてが私有のもとにおかれているわけではない。都市空間そのものが、都市住民にとっての行為の場である以上、行為空間を成立させるための総有性を完全になくすことはできない。また、道路、公園など様々な集合的消費(collective consumption)手段は、不特定多数の者の利用が可能とされねばならない機能であり、外部性をもつから、個人の私有のもとに生産することができず、やはり総有性を持つ。しかし同時に、官僚化された都市では、それら集合的消費手段の供給者は、その都市空間を支配する権力を排他的に有する主体以外にあり得ない。空間を支配する者が空間の総有性自体を自己の支配下においてしまい、それによって都市建造環境の総体が生産されている。それゆえ、そこから排除される者が必ず生れる。

だが、ファベーラでは、都市空間そのものが、支配者ではなくコミュニティの総有なのだ。ファベーラとは、かかる空間を基盤とし、国家や都市支配者からの支配をはねのけてその住民自身によって直接に形成されるコミュニティである。個々の住宅は貧しく、美観には乏しいかも知れないが、全体とし

て見れば、ファベーラは、総有を行なうコミュニティによって自治的に管理された独立した都市空間なのである。

III 土地なし農民運動：ポルトアレグレ近郊の農村を例に

1. はじめに

ブラジルにおける空間の所有と管理の特性は、ファベーラ以外の事例からも分析することができる。そのひとつが、土地なし農民運動(Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra, MST)と呼ばれる大規模な社会運動である。本章では、MST運動がどのようなものなのか解説した上で、実際にブラジルのポルトアレグレ近郊でその運動が行なわれている農業地帯を視察した体験を踏まえ、空間の所有と管理という枠組みの中においてこの運動が持つ意義を探っていく。

ポルトアレグレ(Porto Alegre)という都市は、ブラジルの左翼運動の拠点とも呼べる都市で、労働党(Partido dos Trabalhadores, PT)が長い間政権を握り、市民が一定の割合の予算配分を議論し決定することのできる「参加型予算」が取り入れられていたり、ネオリベリズム主導のグローバリズムでない草の根からの真のグローバル化を目指して「世界社会フォーラム」という国際的な会議が毎年開催されていたりしている。MST運動は、こうしたポルトアレグレにおける左翼運動の伝統の中から発展してきた。

2. 土地なし農民運動とは何か

土地なし農民運動を理解するためにはまず、ブラジルの農業の特色について述べておく必要がある。

南米では、多くの国で植民地時代の大地所有制が根深く残っており、ブラジルも非常にかたよった土地配分パターンを示している。かつての農園主の子孫であろう3%未満の農家がブラジル全体の耕地の3分の2を所有し、2500万人もの小作農がわずかな土地を耕し苦しい生活を送っている。いまだに480万の農家は土地を持っていない。その一方で60%もの農地がろくに耕作をされることもなく無駄に放置されている。しかも農家の貧困は深刻化する一方だった。政府から地方への貸与金額が1980年代の180億ドルから44億ドルまで制限されるようになり、農家が恩恵を受けることは難しくなった⁷⁾。

そもそもブラジルの物価・農業生産性からいって、50ha未満の耕地しかなければ、生活に必要な最低賃金を得ることができない。政府の官僚主義的な対応や、「農家の貧困は改善されている」というプロパガンダなどによって、これらの問題の解決はさらに難しくなっていた。

そういった社会状況を、政府による取り組みをあてにせずに、草の根からの運動によって解決しようという動きが起こり始めた。組織は1984年に結成された。自分の土地を持たない数百人の人々が、遊休していたプランテーション農場を占拠し、それに乗っ取って共同住宅を建設した。背後にはカトリック教会の支援もあった。結局彼らは1987年にその土地の占有権を認められている。これが、土地なし農民運動の始まりである。

以降、ブラジル各地で土地を持たない人々が、使われていない農場を占拠し、乗っ取って自分たちのものにしてしまう運動が盛んになった。現在までにおよそ37万世帯以上が7500万ha以上に及ぶ土地の占有権を獲得し、野営地の15万世帯が政府の承認を待っている状態である⁹⁾。

MSTは、自らの運動には憲法上の根拠があり、合法であると主張する。ブラジル憲法第5条には、「土地は社会的機能を満たすため役立てられねばならない」との規定があり、第184条は、「社会的機能を果たしていない農村部の不動産物件は、農地改革のため接収」することを、政府に求めている。国土空間はすべて、合理的な土地利用を義務づけられているという点において国の総有的管理のもとにあり、それゆえ、「合理的で適切な土地利用」の条件を満たさずに空間を私有する者が土地を放置することは、憲法第5条違反であるから、国家による接収の対象となる⁹⁾。ところが国がこの憲法上の義務を怠っているので、MSTが運動体として農地改革を自ら行ない、憲法上の責務を代って果たしている、という考え方である。

ただし、MSTが組織として進めている農地改革は、あくまで貧しい土地なし農民が空間をその「社会的機能」が満たされるよう利用するため占有権を獲得することをめざす運動であり、空間の私的所有権獲得は要求していない。占有権は所有権とは異なる。どちらも、その土地に居住し、またそこで耕作など経済活動が続けることを公的に認めるものではあるが、占有権には、その土地に対する自由処分権はなく、売買したり、もともとそこにあった樹木を勝手に切り倒したりすることはできない。MSTが土地の所有権を求めないのは、本質的にMSTの運

動が、空間の私的所有を認める社会そのものを止揚しオルタナティブな空間所有のあり方を模索する運動、すなわち空間を個人の所有物とせず、民衆の総有とすることを目指す運動だからである。

MSTの運動は、社会的機能を満たしていない大農場の土地を、憲法の規定に沿って土地なし農民に再分配するだけで終わるものではない。その農民たちの生活にかかわる、教育、ジェンダー、文化、環境、健康など人々の生活全般の向上をはかる大規模なプロジェクトとなっている。たとえば生産性を最大化するため、生産協同組合や小規模な農業事業を興している。今ではブラジル国内23の州によって組織される全国的な運動へと広がり、様々な人権グループ、労働組合、国際機関からの支援や、The Right Livelihood AwardやUNICEF教育賞など多くの賞を受けて、その運動の理念と実践は、国際的に認められている。

以上のようにMSTはラテンアメリカでも大きな社会運動であり、MST運動家は、自身の運動を、世界でもっとも成功している草の根運動のひとつであると評価している¹⁰⁾。

当然、これだけ大きな運動であり、しかも他人が私的所有権を持つ空間を占拠して乗っ取るという大胆な闘争戦術には反発も多かった。それゆえ、MST運動やそれに参加する人々に対して、これまで無数の弾圧が各地で行なわれてきた。サンパウロやパラナ、ペルナンブーコなどを中心に政府の憲兵隊による不当な暴力が繰り返され、過去10年間で1,169人が殺された。殺された者の中には、労働者のリーダーや、教会の人間、法律家、州の代表者などまで含まれていた。しかも、このような悲惨な状態にもかかわらず、弾圧を加えた者の中で起訴されたのは58件、有罪判決が下されたのはわずかに11件という結果だった¹¹⁾。

この苛酷な弾圧に対し、2000年の4～5月に大規模なデモが行なわれた。多くの地方の零細農家が土地をさらに占領し、行進し、政府施設などを占領した。労働組合運動など他の社会運動との連携も見られ、15万の農家が500以上のキャンプを形成したという。

以前はこのように時として暴力的な衝突が権力との間に起こっていたのだが、運動が広がるにつれ、政府もMSTの力量を認めざるを得なくなった。弾圧は和らぎ、対立は対話によって解決されるようになった。今では州から公的に土地を譲り受けるという事例も存在しているという。

MSTは、粘り強い空間をめぐる闘争を展開した

結果、ブラジル社会において認知され、勝利したのである。

3. MST 運動の現場で (1)——自分が管理する土地を持ったばかりの農場夫婦

我々は、ポルトアレグレから車で1時間半ほどの距離にある、カルクエアダス (Charqueadas) の村で実際にMST運動が行なわれている現場を訪れた。実際に土地を獲得できた農民の様子を視察し、また直接話を伺う機会を持ったためである。

ポルトアレグレからウルグアイとアルゼンチンにつながる幹線国道を走ると、両側には、ひたすら広い農場や牧場が続いている。農業の土地利用が粗放的であることは、すぐにわかる。見渡す限りの平原のあちこちで家畜がのんびり佇んでいる風景は一見長閑だが、それは、ブラジルの極端な格差を生み出している大土地所有が貧困者を空間から排除していることを示す景観なのだ。MST運動は、空間の私的所有の上にあぐらをかいたこの不公正な粗放的土地利用に対し、闘いを挑んだ。

1時間半ほど走り、車はカルクエアダスに到着した。我々が本日視察する、MST運動によって人々が占有権を獲得して居住する集落は、この街の近くに点在している。

はじめに訪れたのは、自分の土地の占有権を持ったばかりの農場夫婦である。車を降りると、ジョセ (Gose) さん一家が私たちを出迎えてくれた。

夫婦はもともと、別の地方の小作人だったが、5年前にMSTに入会し、2年半前からこの土地へ入った。ご夫婦の兄弟はみな都会に出てファベラに住み、そこで仕事も収入も不安定な生活を強いられているという。しかしご夫婦は土地が好きだから、自分の土地を持って農業を営み、苦しくても安定した生活への道を選んだという。ここへ定住する前は土地を転々とし、12回にわたり州警察の立ち退き命令によって追い出され続けた。だが、粘り強い闘争の末、昨年ようやく裁判所から許可が下り、正式に占有権を獲得して、夫婦はこの地で農業経営を始められるようになったのだ。MSTに入ってからこの土地に落ち着くまで2年半かかったが、それは短いほうらしい。憲法の規定からしても、まじめに耕していれば、許可が下りやすいのだ。

ここは、州立銀行のひとつであるリオグランデスル銀行 (Banco de Rio Grande Sul) が所有していた土地、つまり州の土地といってよいものだった。州が所有する土地に占有権が認められたのである。だが、所有権が委譲されたわけではないので、木を切

るのにもいちいち許可が必要らしい。

耕作している作物は、主に野菜とコメである。野菜は自給用と販売用を兼ねている。MSTが作物を受け取りに来るので、MSTを通じ共同出荷もできるが、自分たちで直接売ったほうが良いと夫婦は語る。町の人々に面と向かって自分たちの作物を売ることで、「よそ者」である自分たちを受け入れてもらうことができるからだという。よく町まで自転車で行商に行くそう。とくにコメは、サンパウロ等に住む日系人が高値で買うため、かなりもうかる作物で、商社との契約栽培も行っている。コメを栽培しない時期は自給用のトウモロコシを栽培している。自分たちの食料と、家畜の飼料に使うのだ。

夫婦は、私たちに農場を案内しながら、どこまでが自分たちの土地かを指し示してくれた。耕地面積は、15haである。平均耕地面積が1haにも満たない日本の農村の感覚からすれば、かなり広い。歩いていくと、ごんまりとしたユーカリ林が広がっていた。この木を薪として使っているそう。

ユーカリ林の先の小さな畑には、青々としたキャ



写真4: MST運動で獲得したGoseさんの畑。野菜が集約的に栽培されている。

(筆者撮影)

ベツが整然と並んでいる。ここで私たちは、夫婦が飲んでいるマテ茶をいただいた。いただくといっても、一つの器をまわし飲みするのがこの地域の一般的な飲み方である。壺のような独特の器に茶葉を詰め込み、お湯を注いだ部分にフィルターをついたストローをさして飲む。日本の抹茶とそう変わらない味で、抵抗なく飲むことができた。

耕作をするほか、豚、鶏、兎などの家畜や家禽も飼っていた。

ご家族の住む家は、木造で簡素な作りだ。中は暖房がきいていて暖かい。衣類や食器、食料が雑然と狭い室内に詰め込まれ、なかなか生活感があつた。狭い分、空間の有効利用がはかられている。冷蔵庫

があるが、まだ電気は通っていないので、棚として使っている。政府はそういったインフラ整備に関して全然動かないらしい。他の農家では、ディーゼルで自家発電しているところもあるという。ここの食料はほとんどすべて自家製だ。チーズもソーセージも、自分たちで作っている。めずらしい青い卵も見かけた。

この家で暮らしている家族は、夫婦とその娘である。娘は毎日スクールバスで普通学校へ通学している。息子もいるが、現在はMSTの経営する農業高校の寮に住んでいるので、この家にはいない。食料は作物と家畜でほぼ自給していて、政府から現物による生活保護を受けている。生活は決して楽ではないが、自分たちの土地があるということが重要だ、と夫婦は語る。

家をあとに少し歩くと、井戸があった。といっても、レンガで囲まれた典型的な井戸ではなく、地面に丸く穴が掘ってあるだけのものである。深さは約2.5m。水溜りと間違えて足を突っ込んだら、深い井戸の中に落ちて一巻の終わりだ。囲がないため、雨天時に汚水や家畜の糞尿が流れ込んでしまい、飲み水としては使えないという。近くには洗濯場があった。

夫は肩をこわし重いものを持ちたりできないため、今では奥さんが主に力仕事をしている。たくましいこのひとりの女性が、生活面でも精神面でも家族をしっかり支えていると感じた。2年後には、この農場に果物ができるといふ。

このように、MSTのメンバーが空間の管理を獲得して間もない集落では、まだ電気・水道などのインフラが整っておらず、家の造りも非常に簡素である。住民はそれぞれに自分が獲得した土地を耕作し、販売まで自分でやっている。食料はほとんど自給である。大規模な農業機械がなく、占有権を得た土地はまだ開墾しきっていない。生活は決して楽ではないが、ファベレーラや貧困層出身者が大部分を占める彼らにとっては、所有権が依然他人にあるとはいえ、苦しいながらも安定した生活を送れるようになっていた。

周辺の粗放的な牧場とくらべ土地利用の集約度が圧倒的に高いので、景観的な識別はさほど難しくないが、一見したところはただの農家である。しかしその背景にはやはり社会運動としての様々な困難がある。運動に参加してから土地の占有権をもらえるまでには非常に多くの時間と苦勞とを要する。運がよければ半年でもらえるが、長い人では6年かかることもあるらしい。その間、様々な土地に住み着い

ては警察や所有者に追い出され、各地を転々と移動しなければならない。運動に参加したといっても、空間を所有し支配する権力との闘争は、決して生易しいものではない。占有権獲得の前に脱落する者もいる。だが、その過程の中で、自らの生きる糧である空間は闘わなければかちとれないという運動の論理が、彼らの骨の髄にまでたたき込まれてゆくのだ。

4. MST 運動の現場で (2)——MST の集団農場

次に私たちは、占有権を得て定住してから久しい、MSTの集団農場を視察した。

この農場の家々はもはや普通の住宅で、ひとつひとつの家がある程度の大きさを持ち、中にはレンガなどでしっかりと建てられた頑丈そうな建物もある。

27世帯の家族がこの組合に所属し、集団農場を経営しているのである。

まず、集会所を訪れた。ここは、住民の共同食堂



写真 5：MST 集団農場の住宅地区
(筆者撮影)

や会議所など、一種のコミュニティセンターとしての機能があり、この集団農場の農民全体に共有されている。食堂の壁には「É no coletivo que o sonho vira realidade. (みんなで協力すれば夢はかなう)」 「Nossos filhos herdarão nossa luta, nossa terra, nossos valores e nossos sonhos. (我々の闘争、土地、価値、夢を相続しよう)」といった、MSTのスローガンが描かれ、スウェーデンのThe Right Livelihood Awardの賞状が掲げられていた。

この集団農場の人々は、MSTが創立されて間もない1987年に運動を始めた。以前は、ほとんどが貧しい小作人や農業労働者であったという。現在の土地に落ち着くまで、5ヶ所もの土地を移動した。使われていない土地を見つけて占拠し、政府や警察に立ち退きを命じられ、また新たな土地を探すとい



写真6：馬に乗って遊ぶ集団農場の少年
(筆者撮影)



写真7：ミツバチの巣箱の製作
(筆者撮影)

うことを繰り返し、途中で脱落する者も出た。だがその中で、90年ごろから政府とMSTとが交渉できる関係となり、MSTのメンバーたちは少しずつ土地をもらえるようになっていった。今では不撓不屈に闘いさえすれば、運動の成果として、ほとんどの人が土地をもらえるようになっていくという。

ただし、この集団農場にいるMSTのメンバーは、土地の所有権を求めている。政府は、所有権を出しても良いと知っているとのことだが、上記のように、所有権社会を止揚するという運動の理念に基づき、この集団農場の人々も占有権まででよいとしている。

ここでの作物は、牛・豚・鶏などの家畜、野菜類、米、トウモロコシ、豆類など多岐に渡る。集落の人々は生産、食品加工、販売のグループにわかれ、かつての中国の人民公社のように、分業体制で協働生活をしているのである。

集会所の裏にはシュラスコ場があった。少し足をのびしたところには学校がある。レンガ造りのきれいな建物だ。この学校は公教育の課程を教える正規の小学校として認められており、公式のカリキュラムで、州の予算を使い、先生を市から派遣してもらい教育を行なっている。ただし小学4年生までしかない。それ以降は遠くの学校に通うか寮に入ることになるのだという。

集団農場内の道路は、舗装されておらずところどころ凹凸が激しいが、きちんと整えられている。道路の周囲には家畜が至るところにいる。少年が馬に乗っていたり、牛車の子供たちを乗せてゆっくりと道を進んでいたりと、童話の中のような牧歌的な光景が広がっている。社会運動というと、看板を持った人々が街を行進して時に暴力が飛び交う物騒なイメージを抱きがちである。我々もMSTと聞いてそのようなものを少なからず想像していただけに、

まったく正反対の長閑な様子に驚いた。

一方で、近代的な農業のための施設もかなり揃っている。倉庫には、農業機械・器具が保管されている。当然に農業機械類は共同所有で、国から援助を受けながら共同購入したうえ、メンテナンスや修理を自分たちでやっているという。屠殺場、製材所を通り過ぎる。いずれも建物は頑丈に造られている。さらに行くくと、牛の搾乳所がある。牛乳をためる巨大なタンクや無数のパイプ群が整い、牛乳タンクは綺麗に清掃されていた。だが、ここではまだ製品段階の牛乳までは加工できず、タンクに入れて別の工場へ運んでいるとのことだった。

豚小屋では、大量の豚がせまい空間に詰められている。この豚は草食でよく歩き回るため、脂肪分の少ないしまった肉がとれるという。近くには醸造所もあった。酒まで自分たちで作っているようだ。

畑には青々とした作物の葉が茂っていた。ビニルハウスに覆われた温室を通過し、飛び越えられる程度の幅の狭い川に渡された木の板で川の向こう側に行くと、集団農場の人たちが一生懸命ミツバチの巣箱を製作していた。

集団農場内には、六角形をしていて2階建てのレンガでがっしり造られた特徴的な建物があった。ここも集会場のひとつで、かつてここに「世界社会フォーラム」の視察団が訪れ、2000人もが参加してシュラスコパーティが行なわれたらしい。

5. 土地を獲得するまで「永続革命」を闘う人々——ポルトアレグレ連邦政府庁舎前

MSTの農場を視察した後、私たちは、再び車でポルトアレグレに戻った。

西日がまぶしい頃たどり着いたのは、連邦政府の農業牧畜補給省庁舎である。7、8階建てとかなり高く、いかにも連邦政府といった感じのきれいに

整ってはいるが、無機質な建物であり、官僚制を象徴する「空間の表象」というにふさわしい。ここに隣接して、MSTの約400世帯もの人々が、空間を占拠して土地を要求し生活しているテント村の「表象の空間」が広がっている。

インクラと呼ばれるこのテント村は、政府に対する抗議行動のように見える。景観としてはそれに近いものだが、長年の闘争の結果、土地なし農民勝訴の判例が積み重ねられ、MSTの運動は公的に認知されてきた。現在では実際に政府と深い対立があるというわけではなく、かつてのように警官隊から血の弾圧が加えられるというわけでもない。つまり、ここでテント生活を続けていれば、いずれは土地が手に入るのである。施設の外の旗竿にひるがえっている、政府の建物であることを示すブラジル国旗の下に、誰かがMSTの旗を勝手にくくりつけている。だが、政府側はそれをあえてはずそうとしない。これが、政府とMSTの現在の「共存」関係を象徴している。



写真8：ポルトアレグレの政府庁舎前に立つブラジル国旗の下にはためく MST の旗
(筆者撮影)

では、なぜそれでもなお、このような「空間の表象」と「表象の空間」との奇妙な対立がここに存在しているのだろうか。

それはまさに、MSTが空間の支配と管理をめぐる社会運動だからであり、MST自身が、そのような社会運動として自己を永続させることを望んでいるからである。

MSTを媒介にした仲介業者の登場は、まさに、社会運動を制度化し、市場化し、そして形骸化するリスクをはらむ厄介な存在だ。政府とMSTの関係が事実上制度化されるようになったために、それ

を利用する「仲介業者」が現れはじめたのだ。自分の土地をもらうにはまずMSTに入会する必要がある。だが、入会が認められるのはそれなりに難しい。そこで、仲介業者は、MSTに入会できない人に土地を貸し与え、小作人として働かせるのである。その小作人がやがてMST入会に成功し、自分の管理する土地を持つようになるまで、これが続く。これはまさに、MSTをひとつの制度の要素として利用したビジネスだといえる。こういった仲介業者が増えることで、ますますMSTは、本来的な社会運動の理念からかけ離れ、通常官僚機構の一部となり、市場経済の中に包摂されて運動が形骸化してゆく危険が高まってゆく。

社会運動は、当初、政府などの権力への抵抗として生まれる。しかし、その運動が成功を取め広く社会から認められると、徐々に社会運動という意味合いは薄れ、自動的に便益が手に入る既定の手続きとして制度化・官僚化してしまう。こうなれば、当初の運動がもつラディカルな精神は蒸散し、人々は、社会の主体から、再び単なる官僚制と市場主義の駒にひきさげられてしまう。この過程は、各地のいろいろな社会運動によく見られる。かつての日本の大学や高校の紛争などはまさにその典型といえるだろう。生徒が拘束からの解放を求め学校当局に対する闘争の結果かちとったはずの制服自由化は、やがて単なる放任教育の象徴に墮落していった。1917年のロシア革命が、やがてソ連の官僚制スターリニズムに、そして国家資本主義に変質していったことは、よく知られている。

運動をそのように変質させ、風化させてはならない。それを防ぐには、常に権力に対し闘いを挑み、それを続けなければ望むものはかちとれないという「永続革命」の理念を、MSTは、運動に参加する者の心に刻みこまなければいけない。そのひとつの手段が、今回見たテント群なのである。

ここに、社会主義思想におけるトロツキーの影響を感じることができる。事実、MSTも支持母体の1つとなり、政権与党となっているブラジル労働党には、1938年、メキシコ亡命中だったトロツキーが主導して組織された第4インター系がそれなりの影響力を持っている。MSTが、自身を永続的に空間への権利の獲得を目指す社会運動であり続けるため構築している巧妙なシステムを表象する景観が、このテント群なのである。



写真9：政府庁舎の門前に並ぶMSTのテント村と、そこで生活する家族の子供たち
(筆者撮影)

この意味でも、MSTは非常に成功している空間的社会運動であるといえる。政府の施設の横で黒いテントが物々しく並んでいる様子は、我々の多くが抱く一般的な社会運動のイメージと近いだろう。テント村での生活は苦しい。だが、このようにして苦しい生活をする中から、MSTの人々は、空間を我が物にするためには権力と闘っていかねばならないこと、そして闘いの結果かちとった自らによる空間の占有と管理という勝利の美酒がいかにか貴重であるかを、否が応でも身体で学び取ってゆく。それにより、MSTは、運動として永続するのである。

私たちは、テント村を見てまわった。人々はテントに2ヶ月以上住んでいるらしい。多くの人々は、家族揃って生活している。MSTの人々がやって来る前、ここはなにもない空き地だったという。テントの中にはテレビまで備わっていて、意外と人の生活の場としてしっかり造られているという印象を受けた。学校や薬局の機能を果たすテントもあった。学校は、正規の学校として政府から認められているというから驚きだ。テント群のあちこちで小さな子供が遊んでいた。みな元気がよく、私たちに興味を示して集まってくる。だが、貧困な家計であり、やはり栄養が不足しているのだろう。腹の出た子が多かった。

ここにいる人々には、インクラから生活用品・食料が支給される。他の協同組合からの援助もあり、中には市に出稼ぎに向かう人もいる。しかし、テント村での生活が、不安定で非衛生的であることに変わりはない。待っていればいつかは土地がもらえるとはいえ、いつもらえるのか、どんな土地がもらえるのかは、最後までわからない。

この場所からの立ち退き命令は当分出ないようだ。連邦政府の土地ではあるが、無理に立ち退かせれば、提訴されて政府が行政訴訟で敗訴する事態も

起こりうるから、政府はそう簡単に立ち退き命令を出すわけにはいかないのだという。今後もしばらくはこの場所で、公的な制度としてではなく、闘争による空間の獲得という、MSTが仕掛けた舞台を通じて、貧困な人々に土地の分配が行なわれていくのであろう。

6. MST運動が意味するもの

以上、MST運動についてその概要と実際の様子を述べてきた。では、この運動がどんな意味を持ち、現代社会の空間管理のあり方としてどのように位置づけられるだろうか。

まず、MST運動の注目すべき点は、それが生産の場所に関わる社会運動だということである。現代において社会運動は、消費者側の立場からのものであることが多い。生活協同組合や環境保全運動などはすべて、消費者が要求する運動である。それに対しMSTは農業を行なう土地を確保するための、すなわち生産者としての運動である。直接生産する側による社会運動でここまで大規模に拡大し、かつ成果を取めている例は、世界でもそう多くないだろう。

このような運動は、まさに空間の所有形態が総有から私有へと移行し、人々が空間から疎外されてゆく歴史的過程を逆転させようとする試みであるといえる。空間所有が総有、つまり土地がそこに暮らす共同体の人々の共有財であった時は、特定の誰かが不利益を被ることはなかった。作用空間(locus standi)に物理的排他性がある¹²⁾以上、各個人が好き勝手に土地を耕作することはできないが、土地から得られる恩恵を皆が平等に受けることができた。ところが空間の私有化が進み、総有空間が少なくなると、空間から排除される人々が増えていくに従い、所有する空間とそれに拠って立つことで得られる富の個人差が拡大していった。南米では自分の土地を持たない小作人が大農園主に隷属し搾取される構造が生じ、それが現在の極端な経済格差につながった。空間の排他的私有が生産の基盤である以上、空間私有の拡大は、個人間の経済・社会的格差を固定・強化する。それが続いていけば、矛盾は激化し、どこかで破綻が生じるのは必然であろう。そこから対抗軸が生まれる。空間というのは消費の行なわれる場である以上に生産のため、そして富の獲得のための作用空間であるのだから、その対抗軸は、MSTのように生産者の側からの社会運動として展開されるようになるのである。

MSTが、他者に私有された空間を占有して自分たちの排他的管理のもとにおくことは、現代の空間

所有の様式を根本から揺るがすものであるといえる。ただしMSTが成功を取めたのは、それがブラジルだからという面を否定できない。すでに述べたように、広大な国土を持ち多くの土地が粗放的に充用されていて人々の空間所有の意識が弱いことに加え、ブラジル憲法は一面において国土空間における総有の思想を示している。このことを司法が理解しているからこそ可能な運動形態なのだ。

このような特殊性があるとしても、この運動がグローバルな社会一般に対して示唆するところは大きい。グローバリゼーションを欧米（特にアングロサクソン）のネオリベラリスト的な価値観の世界規模での拡大と定義すれば、空間の私有はそのひとつの側面として世界に拡大していることになる。ならば我々は、MSTを、グローバリゼーションに対するオルタナティブのひとつとしてとらえることができるのではないだろうか。

空間の私有とそれに伴う排除が富の不平等を生み出す構造的問題を指摘し、私有された空間の再分配を行なおうとするこの運動は、土地に根ざした非常にローカルな運動でありながら、グローバルなネオリベラル化へのひとつの対抗軸を我々に提示している。すなわち究極的にMSTは、空間の総有を中心としたよりコミュニティ的な新しいグローバリゼーションによって、空間的資源と、それに基づく富の、より平等な社会的最適配分の達成を目指していく運動だといえるだろう。

IV 結論：権力による空間管理への対抗と、オルタナティブなグローバリズム

我々はこれまで、ファベールならびにMST運動の事例を通して、ブラジルの空間所有の特質を検討してきた。

すなわちそれは、ブラジルの空間所有の緩さ、空間の総有性の傾向である。領域の私的所有を人々は絶対視せず、他者の所有する領域を占拠する行為が一定の正統性を持ち、裁判所は一定期間領域を有効に占有すればそれを既成事実として占有権を認めるように、非常にフレキシブルな空間管理に対する法的・社会的観念を持ったこの国では、その特殊性ゆえに他の国ではあまり見られない空間的社会過程が起こっている。それが都市構造におけるファベールのあり方であり、他人の土地を乗っ取り、占有権を獲得しようとするMST運動である。

既に述べたように、急激に世界中を飲みこんでい

る現代のグローバリゼーションのひとつの側面に、空間管理の徹底化がある。ネオリベラリズムは、その基礎をなす新古典派経済学的前提と同様の性悪説的人間観を採るから、支配者は、なんらかの監視か制裁を常に加え続けなければ、人々は抵抗をはじめ、ネオリベラリズムのレジーム自体が崩壊するのではないかと脅威を覚える。それゆえ、ネオリベラリズムの支配する空間すべてを蔽う管理はさらに強化され、街中が監視カメラで録画されるようになった。そこに、現代の人々が抱えるひとつの重大なストレスと疎外感の原因が生まれている。常に「いまここにある場所」「いま私のある場所」が誰か他者に属し、自己を悪とみる支配者から監視され、自らは他者の所有に満ちた空間から疎外されている感覚。特に人口過密の日本において、私たちは自分が所有することができるほんのわずかな空間しか認められず、ほとんど日常的に他者が所有し監視するパノプティコンの中に自らを置かねばならないことで、人々は神経をすり減らし続けているのだ。

この行き過ぎた空間管理に対し抵抗する論理として、まず、これに反発する者、排除された者が安心して居られる場所であるstray spaceが必要となる。例えばファベールが、これに該当する。ファベールは厳密に有界化されていない、管理されない領域性をもつ。それが、空間管理から排除された者たちが人間的に生きていくための場となっている。

次に、急激に世界的に拡大しつつあるインターネットのバーチャルな空間もまた、そういう場所のひとつとしてとらえることができる。インターネットは、その技術的特性からして所有権の観念が弱く、総有性の高い仮想空間である。誰もが自由に自分のウェブページを持つことができ、それを利用して自分の趣味や意見を発信することができる。電子掲示板は時に無法地帯となって、個人のプライバシーや機密情報の漏洩を引き起こすほどである。このようなインターネットの氾濫が生じたのは、現実の空間がますます厳重に管理され人々がそれに縛られるようになった反動である。市民的自由が厳しく管理されている中国でブログやネット掲示板が著しく普及しているのは、勿論偶然ではない。高い総有性の空間、自由な絶対空間。ネオリベラリズムのもとで空間が私的に管理されればされるほど、人々はますますそのような空間を追い求め、そこへと逃げ込んでいくのである。

リアルの世界における空間管理への抵抗の場が、ファベールであり、MSTなのだとなれば、これらは、個人の意思や権利を無視して世界を飲み込まんとす

る現代のネオリベリズムのもとでのグローバリゼーションの急激な流れに、空間管理への抵抗、すなわち所有権社会への抵抗というアプローチからひとつの楔を打ち込み、総有空間を目指すという道から、グローバルな規模での共同体——コミュニティ——社会の構築を展望する橋頭堡といえるのではないだろうか。

空間を私的に所有し管理しようとする権力の急激な動きに抵抗する、互酬的グローバリゼーションへのオルタナティブな可能性。それが、ブラジルのファベラとMST運動が提示するものであり、現代世界において空間から疎外され監視のもとにおかれた人々の行く手にあるsonho(希望)なのである。

謝辞

本稿は、2004年度に一橋大学経済学部水岡不二雄ゼミで行なった、ブラジル、ボリビア方面への海外巡検におけるフィールド調査を元に、帰国後ゼミでの討論を踏まえて桔梗聡が提出したタムペーパーならびにゼミ巡検報告を元とし、これに水岡が加筆補正を加えて完成させたものである。現地でお世話になったペドロさんはじめMSTの方々、そしてポルトガル語の通訳をいただいた日系人の福岡様に、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) <http://georgewbush-whitehouse.archives.gov/news/releases/2004/08/20040809-9.html>
- 2) Garrett Hardin, 'The Tragedy of the Commons' *Science* Vol. 162 no. 3859, 1968, pp.1243-1248
- 3) Fujio Mizuoka, 'Capitalist Regulation and the Provision of Public Transportation in Japan', In: Nicholas Low ed, *Transforming Urban Transport: The Ethics, Politics and Practices of Sustainable Mobility*, Routledge, 2013, pp.148-156.
- 4) 水岡不二雄「登山が求める、コモンズの復権」『HQ』29号、2011、40頁。
- 5) Chauncy D. Harris and Edward L. Ullman, 'The Nature of Cities', *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 242, 1945, pp.14-15.
- 6) 水岡不二雄「香港のスクォッター問題における階級、民族、および空間一植民地を支えた都市産業体系生産への序奏」『土地制度史学』41巻1号、1998、8-9頁。
- 7) <http://www.mstbrazil.org/>
- 8) 'What is the MST?' <http://www.mstbrazil.org/whatismst>
- 9) 'Need and Basis for Agrarian Reform'<http://www.mstbrazil.org/about-mst/agrarian-reform-need-basis>

- 10) <http://www.mstbrazil.org/>
- 11) <http://www.mstbrazil.org/>
- 12) 水岡不二雄編著『経済・社会の地理学』有斐閣、2002、61-62頁。

参考文献

- The White House President George W.Bush 2004. <http://georgewbush-whitehouse.archives.gov/index.html> (最終閲覧日2015年2月18日)
- Garrett Hardin 1968. 'The Tragedy of the Commons'. *Science*, Vol.162 No.3859, 1243-1248
- Fujio Mizuoka 2013. 'Capitalist Regulation and the Provision of Public Transportation in Japan'. In: Nicholas Low ed. *Transforming Urban Transport: The Ethics, Politics and Practices of Sustainable Mobility*, 148-156, Routledge.
- 水岡不二雄 2011.「登山が求める、コモンズの復権」『HQ』29号、40
- Chauncy D. Harris and Edward L. Ullman 1945. 'The Nature of Cities'. *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.242, 14-15.
- 水岡不二雄 1998.「香港のスクォッター問題における階級、民族、および空間一植民地を支えた都市産業体系生産への序奏」『土地制度史学』41巻1号、1-17.
- Friends of the MST. <http://www.mstbrazil.org/>(最終閲覧日:2005年1月)
- Friends of the MST. 'What is the MST?' <http://www.mstbrazil.org/whatismst> (最終閲覧日:2014年12月23日)
- Friends of the MST. 'Need and Basis for Agrarian Reform' <http://www.mstbrazil.org/about-mst/agrarian-reform-need-basis> (最終閲覧日:2015年1月15日)
- 水岡不二雄 2002.『経済・社会の地理学』61-62. 有斐閣.